

明らかに現われていると思われるのである。

(平成十三年六月例会)

\*\*\*\*\* 紹介\*\*\*\*\*

吉良 枝郎 著

『日本の西洋医学の生い立ち』

著者は二つの医科大学の多忙を極める臨床医学の教職を歴任し、医学部長の要職を勤められながら、日本における現代の西洋医学の生い立ちを、分かり易く後進の若い医師たちおよび患者に知ってもらいたいと念願されて筆を取られたと跋に書かれているが、その目的は充分に達せられていると思われる。

ともすれば医学史の成書は、博引旁証で、文章も固く、読者に専門家を意識して固い姿勢をとるのが通例であるのに、本書は行文は平易で、滑らかであり、といて通俗に墮すことなく、要所に幕間として興味深いトピックも配列され、抵抗なく読みおこせることができる。日本の読書人にとつても高度の教養を身につける格好の良書である。

私が通読して気付いた二、三の点を蛇足として以下に付け加えさせて頂く。

外来文化が我が国に入るときに、伝える側と受け取る側の二通りの観点があるのは当然である。本書は鎖国体制の中で西洋医学を受容した蘭学者たちを中心とした後者の立場から筆を進めておられる。封建時代の日本で西洋医学を伝えた前者の立場にたつて書かれた J. Z. Bowers の *Western Medical Pioneers in Feudal Japan* の名著があり、本書にその引用がないのが残念に思った。

その中に、ボンペが長崎に初めて西洋式の病院を作った時、長崎奉行は自分の身内や高級役人や富裕者だけに病院を利用させ、一人の庶民・農民・商人も入院させなかったことに対し、ボンペは医療は分け隔てなくすべての階級の市民に施されるべきだと抗議したことが紹介され、技術と知識としての西洋医学を貪欲に獲得しようとする日本人に対して、西欧医学の医療の恩恵を庶民に分け隔てなく与えようとする、ボンペの人道主義との軋轢が指摘されている。このような視点は、日本側に立ってだけ西洋医学受容を論ずる時に見失われるが、実は大事な視点なのである。

日本への西洋医学の伝達は、勢い長崎のオランダ医の働きが中心となるが、二二〇年にわたる出島の歴史で、来日した商館医は百五十名を越えるに拘わらず、日本人に西洋医学を伝達することに貢献したのは、ケンペル、ツェンペリー、シーボルト、ボンペ、ポールドウインの五指を屈するに過ぎないことは一考を要する。残りの百四十数名が、稼ぎのためにやってきた碌でもない医者たちであったかどうかは分からない

いが、オランダの対日貿易は利潤のみを目的とし、相手国への文化的貢献は意図しなかったことも確かである。

C. Boxer "The Dutch seaborne empire 1600~1800" によれば、オランダの海外通商基地の中で、ベンガルと出島は最も悪名高き退廃した基地でもあった。その中で五名もの優れた医学者、臨床家、かつ高邁な精神の持ち主が来日したことは、日本にとって僥倖とも云うべき出来事であったのだ。

本書十一章は「ペルリ提督は日本の医学にも大きな衝撃を与えた」との題であるので期待して読んだが、内容はポンペの医学教育と日本人のオランダ語学習のことであり、著者の意図がよく分からなかった。表題がオランダ語の時代が去って英語の時代が予測され、蘭学者がやがて蘭字も無用になることの衝撃を受けたの意なら、それなりの事実を挙げて説明されないと、この題では読者は戸惑いを覚える。また蘭字に決定的打撃を与えたのは、明治政府のドイツ医学採用方針の決定であるから、それにも言及する必要があるだろう。

本書を拝見して一いつ気になったことがある。著者がご自分の所論を支えるのに遠藤周作、吉村昭、司馬遼太郎らの作品を引用されていることだ。彼らは史実を良く調べ、勉強してはいるが、その作品はあくまでもフィクションであり、創作の意図に従って歴史事実を自由に取捨選択し、想像力でそれを繋ぎ合わせているので、それを歴史的価値あるものとすることはできない。吉村昭の『長英逃亡』は文学作品としては立派でも、高野長英の研究の参考にはならないので

ある。特に司馬遼太郎は傾向的な作家で、彼の民族主義的歴史観に都合のよい部分だけを歴史の中からつまみ食いしている。その作品を引用するのは余程慎重でなければならぬ。そうでないと著者は司馬史観の共鳴者なのかと疑われる危険がある。

それともう一つ、本文の中に諸先輩の所説を引用するのに、某々大学名誉教授という長い肩書きが目についた。著者の敬意とは別に、一般の読者にはなじみのない表現だと思う。詳細な年表と参考文献は有用である。

(大島 智夫)

〔築地書館、東京都中央区築地七―四―二〇、電話〇三―三五四二―三七三一、平成十二年三月十五日、A五判、二二一頁、本体二〇〇〇円〕

瀧澤 利行 著

### 『健康文化論』

本書は、三十歳代の気鋭が健康文化に切り込んだ意欲作であり、まずはその労を多としたい。著者は「二十一世紀社会の大衆の健康問題を先導していく主要な概念の一つ」(九頁)として健康文化を位置づけ、その定義と内容と機能の解明を試みている。

本書は三部構成であり、第一部は著者が健康文化と考える